

# 記念は反革命の足掻きである

内村 剛介

そこから曲り、その曲りは時がたつにつれて末広がりになり、今ではもはや原点に帰りようもないといった分岐点がある。しかしひととはこの曲りを見ないことによって、曲りそのものの存在を非在とし、現時点を原点の延長線上に見ようとする。

このようなひとつとつてこの延長線は長いほどよく、その長さの上に、二〇年を、三〇年を、そして今五〇年を刻むことはめでたいことである。だからこそ、まさに記念にこと欠かぬのである。原点の質が雪だるま式にふくらんで行くのであるから、めでたい。質はそのとき以来確固として固着し、五〇年の永きにわたつてもつばら増殖を遂げたということであるから、めでたい。つまりこの「記念」にあつては量が問われているのであつて、質を問うのは不敬にあたることであろう。量と質とのかかわりあい問われないうめでたさの中に自讃の「記念」があり、この自讃はその「質」の保障にもと他讃を求めて止まない。

だが果して革命なるものは固着を記念していいものであろうか？ 原点の質が不問に付されているとき、いったいわれわれは長生きだ

けを誇ることに躊躇しないですむであろうか？ 革命の歴史に記念すべきものがあるとすれば、それはこの原点の質が、膨化のもたらす不可避的な墮落とどのようにたたかひ、そこにどのようなダイナミズムを示したか、そしてそのダイナミズムのゆえに、われわれを原点から隔てる二〇年も三〇年も、また五〇年もその長さを感じさせないものとして、つまり、非在に近いものとして、そこにあるということではなればなるまい。

革命を記念するということが自体が運動のメカニズムの制止を意味する。この記念は、ところが、運動のめでたい自足的転回として自讃される。いやそのように自讃できる者だけが「記念」を語るのである。これは無知のなすわざではない。原点の質が五〇年に亘つてめでたく転回発展したと説かねばならぬものがそこにあり、それゆえに年々の記念を語るのである。それはレーニンをミイラの拝観物とした思想に一直線に通じている。歴史の転回を、時間の流れを、押しとどめようとする空しい足掻きがそこにある。もしわれわれが五十周年を何らかの意味で「記念」しようとするなら、われわれは

この足掻きの由つて来るところを展き、「記念を説く者」たちが指摘をためらうところのものを手づかみにして示すべきであろう。つまり、そこから曲り、その曲りは時がたつにつれて末広がりに開き、今ではもはや原点へ帰ろうにも帰りようとしてないといった分岐点を示すことが、五十年記念に当りさしあたりわれわれが手を染むべき事業であるだろう。

権力の質的な転移はまだ革命ではない。ひとりびとりの精神を逆立ちさせ、そうすることによって質の変革を持続的に強いるものが革命である。政治革命は社会革命のための条件にすぎず、社会革命は文化革命の条件であるにすぎない。人間ひとりびとりの精神構造の変革をもたらすものが文化革命である。原点はこの人間ひとりびとりの精神に在る。革命はひとりびとりの変革を迫るのである。人間集団の変革、コレクチヴの変革では足りない。コレクチヴの変革はたやすく「変革の外貌」をとりはするが、いふなればこれは、人間集団に固有な「多きに就く」原理のそのときどきの情況に応じた変貌にすぎない。それは集団自体が持つ奴隸根性のうごめきであつて、どのようにヒロイックな変革の姿を採ろうとも、変革の名に値するものではない。

人間はみずから社会の成員である意識する以前においてすでにパーソナリティとして独立している。だから人間集団の個人々人に対する社会的意識的な働きかけといったものの成し得ることは多寡が知られているといふべきである。この個人々の領域が何であり、それが社会集団とはじめて向い合う原点はどこかといった問題は、いま五〇年を記念する者たちによってまともに提起されたことがない。

期である」という説得に応じかねるのだ。来るべき世代のためにみずからの生涯を越えてとかいふレトリックの倚りかかっている。過渡期なるもの空しさにはもはや酔えぬ。藉すに時間を以てせよといわれるが、すでに五〇年間貸し放しであり、それがどうやら空手形であつたということになつたのに、なおさらにその手形の無期限延長に裏書きせよといわれるのであるから、熱意が沸かぬのはなぜかと今更驚くほうがむしろ不思議というものである、といふべきではないか。

何かが曲つたのだ。

その曲りは、個人々が集団の意志に容易に屈するものであるから集団を抑えておけばよいということに発していた。もともと個人々人を軽んじたのではない。集団それ自体を重んじ過ぎたのではない。だが当面の方法として集団を採るほかに方法がないという捉え方があつて、それがやがて、集団を抑えておけば個人々人を抑え得るといったものに短絡していったのだと見るべきだろう。つまり集団と個人々人とのかわりあいには、藉すに時を以てするに従つて機械的なかかりあいとして捉えられて行つたわけだ。いや、かわりあいには集団の側からのみあつたのであつて、個人々の側からはなくなつて行つた。いや、そもそもかわりあいそのものがなくなつたのである。ソビエトがおかれた情況上それは止むをえなかつたのであるというエクスキューズがそれを覆つた。「止むをえなかつた」ということは、これは、歴史に対して受身であるという点で、もはや革命的ではない。ついでに言えば、歴史を「必然の王国から自由の王国へ」の意志の介入として捉える表現には、そのレトリックの勇ましさにも拘らず、歴史への被害者意識が露呈している。ここでは歴史

人は生れながらにして社会的動物なのであるといった捉え方に倚りかかつてゆくオプチミズムは経験的にもすでに破綻している。もしそうであるだけのことならば社会的条件が同じところでは多かれ少なかれ均質な個人々がえらばれるはずであるが、現実にはこの均質なるものの何と皮相であるかをわれわれは十月革命五〇年の今日すでにつぶさに知っているのである。それは動物的・社会的偏差というものであると手軽に片付ける者に対しては、われわれは、その微量な偏差にこそ個人々の存在すべき理由のすべてがあり、それこそその個人々の独立の証しであつて、それを失ふことは革命を失ふことであると答える。革命は何を争うものであるかという意味においてわれわれはこの個人々の存立の問題にかかわるのである。

「集団として処理する以外にどのような方法があるのか？ われわれは『資本主義的意識の残滓』の問題を等閑に付しているわけではない。またそれがじつに長い長い時間ときわめて困難な努力を要するものであることも知っている。藉すに時を以てせよ！——」このような回答、この回答がふまえている傲岸な自意識、「われわれだけが歴史の法則をつかまえており、歴史はわれわれを、われわれだけを溺愛している」といった自意識、——それがたやすく「ミイラの思想」にすべり込みうるものであることを知つた現在、われわれはこの歴史の寵者たちをわれわれむのである。もはや藉すに時間を以てしているわけには行かぬということをも五〇周年の記念としていなければならぬのである。まず第一に、われわれのいのは、われわれの意識的な生涯は、依然として五〇年そこそこであるから、「この地上に人間精神の変革が来るように努めよ、そのためには現在を犠牲にせよ、それが歴史に連なる方法である。今はその過渡

に対する人間の立場はリヴァンジだけである。ここには追いつめられた者の復讐があるだけだ。

止むをえなかつたのである、という点に、いったん退けば——権力を握つてきえいれば、という条件つきではあるが——、すべてはretrospectiveに弁証し得る。この逆行に歯止めはない。それは無限に遡及して行く。だがそれはperspectiveにかんしては、たとえば世界革命の展望にかんしては、非力であつて、それゆえにそこではむしろperspectiveの衣をまとい、retrospectが登場するといった逆立ちが見られるのである。革命五〇周年を記念するといったことはその端的な事例であるだろう。ソ連邦の擁護のためには世界革命を犠牲に供することもまた「止むをえない」ことになる。個人々人と社会とのかわりあいをトータルに捉えずにそのかわりあいを断ち切つた思想は、今や社会集団の側から個人々人を抑えるのではなくて、個人々の側から社会集団を抑えて来る。一国社会主義のテーゼはソビエトの内側ではスターリンのリーダーシップの確立であり、国際的な規模においてはその個人々に当るところのソビエト連邦そのものへの「革命」の従属となつた。

「止むをえぬ」という思想は歴史的是ではあるが、人間的ではない。人間がみずから歴史に挑むというモメントを捨てているという意味で、歴史に対して受身であるという意味で、それは人間的ではない。それは反革命的である。

「止むをえぬ」という反革命的な行動の「曲り」はその端緒を一九一七年四月のレーニンにたどることができる。レーニンが反革命者であるといえれば奇矯であろうか。だが、レーニンを反革命者であるといつてしまえばわれわれの希望がすべて失われるというだけの

理由で、レーニンに対する「不敬」の前に踏みとどまるということは、「多きに就く」心性の証しをあらためてみずから示すというだけのものではあろう。

「止むをえぬ」ということを革命はみとめない。政治の論理は「止むをえぬ」という選択のタームの中にすべてを放り込むものがあるが、革命の論理は「止むをえぬ」ことをついに拒否しつづけることにこそある。レーニンの聖像は革命のシムボルではない。それを聖像としてミイラとして仰ぐことのなかにはわれわれの怯懦な心性が、反革命がひそんでいるのだ。この怯懦な精神こそ本来革命の対象となるべきものであるのに……。

「そのようにいうことは観念のあそびであって、そのような世界からは実践への出口はない。実践には選択の決意が不可避的に伴う」という者には、「にもかかわらず、「止むをえぬ」という選択は、選択ではなくして、選択の破綻である。この破綻を喫した者は君のいう政治の世界においても落伍者である。ロマンチズムとレアリズムの問題はやはり今なお未解決なのであり、力の世界から思想の世界に押し入り、レアリズムがロマンチズムに屈服を強いものに沈黙を強いられるから沈黙しているだけのことであって、解決を見たわけではない」と答えよう。観念から行動への道は直線ではない。それを直線とみる者は当然のことながら観念においても、実践においても、直線とみること自体がもたらしたはずみによって仕返しを受ける。

「それでは行動の機会はついにめぐって来ない」と君はいうだろう。いや、行動の機会はずねにある。今も目前にある。ただし、そ

して「止むをえないこと」はそこから乱発され続発して行くのである。政治には一敗地にまみれても、精神の革命においては、この一敗が来るべき日の肥料となるであろうという確信はここにはない。perspectiveへの不信が、現時点におけるミスチャンスへの恐怖へと連なり、それは今日たたいまわれわれが見ている retrospect を

「記念」する道を無制限に展いたのである。怯懦は勇心の外装を以て現われた。レーニンの搭乗する列車が革命の首都ベルブルグへ向って驀進して行ったとき、革命の精神は、そのいのちは、それに反比例する力を以て逆行の道を同じ速度で驀進していたのである。それは兵士と農民との内に在った革命をも、やがて押しとどめることになる。そうなることは驚くに当らない。レーニンの内にあったのは革命の外装に包まれた巨大な反革命であったのだから。

ここからすでにレーニンらによる革命の弾圧は見えている。自然発生的デモクラチズムの表現であるクロンシュタットの弾圧への道はここに開いている。旧軍事専門家の登用にもトロツキーの赤軍建設は、思想における perspective の欠除を示している。ここでは革命の perspective ではなくてソビエト権力の perspective が問われているのだ。赤軍は敗れても革命の精神は残るといったロマンチズムは、革命の精神は敗れ去っても赤軍は、したがってソビエト権力は、残る——というレアリズムにすり代えられている。不断に抗う人間精神の解放に歯止めが加えられた。時間への不信が、歴史への不信が、人間への不信がロシア革命をその根元において覆うのである。

革命とは何か、それは誰のものか、を明らかにするために、われわれはこの「止むをえない」と称された過程をわれわれの見る革命

の「行動」はつねに試行にすぎず、ついに完成を知らぬというのである。つねに、ついに完成を見ぬものに向って人間を駆り立てて行くものが革命の行程であって、それはいわばエンドレスである。そこには、「記念日」とか称する自画自讃の自足のカーニバルはあつてはならぬのだ。観念の有効性は実践によって検証されるというのはデマゴギーである。観念は観念の世界を持つことよって有効でありうるものであり、観念を一直線に実践に解消することは、観念をもまた実践をも崩壊せしめるのである。

一九一七年四月にレーニンはフィンランド駅に着いている。「ロシアのブルジョア革命が成立した。今は社会主義革命を、出来ることならプロレタリア革命を成し遂げなければならぬ。急ぎ帰国すべきである」——このような情況にあつてレーニンはウィルヘルムと商談し、後者の提供するチャンスを利用した。それは、「止むをえぬ」ことであつた。目的は手段を……！である。これは些事であるだろうか？ そうではない。革命についてわれわれが「止むをえぬ」といえるのは、われわれが許し得る方法は、それが人間個々人に果喰う「多きに就く」「強きに就く」心性に抗うところの因子の培養に役立つか否かという限りにおいて正当性を定めよう。この「抗うもの」を探ることによって十月革命の機を逸すにしても、われわれはカイザーの封印列車を探るべきではない。レーニンはこの封印列車に乗ったときに、無限の退行に道を開いたのである。この負い目はその後永くポリシェヴィキの心理に暗所となって残った。この暗点は恐るべき強迫であつたから、ポリシェヴィキにとつて永くタブーとなり、タブーとなることよつて、そこを覗き込む勇心を奪ひ、民衆に淵源する革命精神をも枯渇させていった。こ

の視点から、つまり官許革命史の設定する方角と対角線をなす方角から、追つて行こう。それはやがて、五〇周年記念が反革命的な足掻きの当然の帰結であることを明らかにするだろう。

ここにトロツキーの赤軍史「革命は如何に武装されたか」がある。「赤軍建設にかかわる私の論文、演説、報告書、檄文、命令、書信、電文その他を出版しようという考えは赤軍五周年との関連で出て来た。」

一九二三年二月二七日という日付のある序文をトロツキーはこのような指摘で始めている。彼は、「記念」そのものにとめたいを見せ。にも拘らず発刊を認める所以のものは、なお次の如き定かでない理由があるからだ。

「しかし、この本は過ぎし偉大な年月を映してはいる。だからこそ私は上述の留保条件のすべてを付した上で発刊に同意するものである。時として昨日を顧んことはわれわれ自身の得げにならぬ。のみならずこの本は、緩慢であるといえ権力の獲得へ向つてはいる国外の同志にとつて、無益でないということもあり得るのである。∧……∨あるいはこの材料が彼らを脅かしている誤謬の一部なりとも避けさせるといったことがありうるかも知れぬ。」なぜ「あるいは……」であり「かも知れぬ」であるのか。どのような留保条件がなければならぬのか。あれほど文字を信じて動じなかつたトロツキーがここでは文字への、文書への、不信をあらさまに示している。「時間」への懐疑が示される。革命の過程に身をおき、権力の座にあるトロツキーにとつて、この「記念」はためらいなしには催しえないものであつた。

無数のメモリアル

松田政男

(BBM通信・会員)

一九六七年六月十五日、安保闘争の敗北の一つの象徴ともいべき六・一五の死闘からちょうど七年目にあたるこの日、人びとは、二つのデモンストレーションをふくむ六つないし七つの集会によってこの日を「記念」した。いま、煩をいとわずにこの奇妙な事態を記録しておくならば、まず、

故・樺美智子が所属していた共産主義者同盟を止揚し継承したと自認している革共同全国委員会派は九段会館で、また組織名を再生している共産主義者同盟派は全電通会館で、さかのほれば何処かで系図が交わるであろう社青同解放派は両国会会堂で、これら三派の破産を宣告してやまぬ革共同全国委員会革マル派は早大構内で、以上四派と理論的実践的に決裂して独自の道を歩む日中青学共闘会議（社学同ML派と社青同マル研派が主体）系は明大学生会館で、それ

ぞれ「記念」集会を開いた。さらに、奇しくも当日、リバルテールの会の例会として笹本雅敏が「直接行動論」を報告したアナキスト系の会合（豊島振興会館）を加えるならば、これだけで六つを数える。

かつて吉本隆明が、「六月一五日夜、国会と首相官邸の周辺は、ふたつのデモ隊の渦にまかれていた。ひとつの渦は全学連主流派と、それを支援する無名の労働者・市民たちで、その尖端は国会南門の構内で警官隊と激突していた。その後尾は国会前の路上にあふれていた。そして、頭をわられ、押しつぶされ、負傷した学生たちは、つぎつぎと後方へはこびだされて、救急車かわるがわるやってきては、それをつれていった」（『機軸の終焉』）と描写したところの「ひとつの渦」は、七年ののち、少なくとも六つの流れとなって分割されたのである。

しからば「他のひとつの渦」はどうだろうか。やはり吉本隆明の描写によれば、七年前、それは次のようなかたちとなって、私たちの目前にあったものである。

「他のひとつの渦は、この渦とちやうど丁字形に国会と首相官邸のあいだの道をながれて、坂を下っていった。そして、ちやうど丁字形の交点のところで、腕に日本共産党の腕章をまいた男たちがピケを張り、この渦が国会南門構内で尖端を激突させている第一の渦に合流することを阻害していた。そこで、丁字形の交点の路上には真空が生れた。その一方では、つい眼と鼻のさきで流血の衝突がおこり、負傷者は続出し、他方では、労働者・市民・文化組織の整然たる行列が流れてゆき、その境では日本共産党員が、ふたつの渦が合流するのをさまたげている情景があった」（傍点原文）

一九六〇年六月十五日、私たち、私も吉本隆明も、今は亡き岩淵五郎も、「無名の労働者・市民」の戦闘体であった六月行動委員会の一員として、この丁字形の交点に位置し、日本共産党のピケ隊と激突を繰返しながら、国会南門構内の闘争に「労働者・市民・文化組織」が合流すべきことを訴こそが私たちの行くべき道であり、同志樺の霊を真に弔う道である」などと、したり顔の情況論で九段会館に集った人びとに媚を売ったりしたことを、私たちは、決して許容することはできないと考える。そして内藤やいいた以下、樺美智子殺しの共犯者たち、この第四機動隊の協働者たちと、七年ののち、エールの交歓をやったのけた二組の密通者、革共同と共産同の主流の頽廢を、私たちは厳しく弾劾する。

一九六〇年四月に、「権威原理と自律原理」のなかで「革共同派、無党左派、独立マルクス主義、文化的前衛、赤色青年団等々の現象は……現代トロツキズムが示しているように、超革命的な反革命運動への逆移行の過程でもあります」と罵り、五・六月の闘争をへた同年十月、この断言に「一字一句も手を加えないことになりました」と追記した「評論家」いいた・ももは、今日、共産主義労働者党「書記長」として私たちの前に立ち現われているけれども、いいたがこの一文を自身の評論集に収録しつづけている限り、いいたと精神のスクラムを組みつづけているわが「トロツキスト」諸君は、もはや、七年後の架空の国会南門構内に

えかけていた。それ自身、肉体を賭けた闘いであったこの衝突について触れるつもりは今の私にはないけれども、しかし、この激突が経過しつづけた午後七時三十分前後、樺美智子が殺されたのはまぎれもない事実であった。一ヵ月後「もうひとつの渦」の尖端を形成した日本共産党は、樺美智子の死に対する自己の「憤激と哀悼」の内容について、次のように述べたのである！

「それは、樺美智子の死のもつ第一の側面、敵の計画的弾圧の犠牲者としての樺美智子という側面にたいする憤激であり、心からの哀悼にはかならないのであって、けっして、もう一つの面、つまり、一貫して国民会議の方針にそむいて、挑発的冒険主義の方針をとりつづけてきたトロツキストの分裂行動のなかで死んだ共産主義者同盟員としての樺美智子にむけられたものではないということである。」（『アカハタ』六〇年七月十八日付）

そして七年後の現在、当時あるジャーナリストによって「感動を半分惜しんだ」と評された日本共産党は、恥ずかしげもなく六・一五メモリアルに全身を登場させたのである。一つは、日比谷公園における民

青系全学連の集会とデモとして、もう一つは、前述の革共同と共産同の「記念」集会に対する共産主義労働者党その他の日共脱党派による代表派遣として、それは、実現した。七年ののち、六・一五の名において「ふたつの渦」は合流してしまっただのである！ ゼンガクレンの名跡争いにこだわる民青系が六・一五闘争の公然たる篡奪者として薄汚なく登場せざるをえない悲惨さに対して、私たちが嘲笑を浴びせかけることは極めて容易であろう。しかし、他方の共産主義労働者党をはじめとする人びと、七年前の六月十五日、「国会南門構内で尖端を激突させている第一の渦と合流することを阻害していた」日本共産党の隊列にあつた人びとが、樺美智子の虐殺に自らもまた手を貸していたことに対する痛切な自覚をぬきにして、内藤知周のように「日本共産党指導部の民族主義・議会主義的指導の誤りを、私は当時日本共産党中央委員会の一員であった責任と自己批判をこめて指摘」するといった一般論を全電通会館で「あいさつ」したり、また、いいた・もものように「プロレタリアートの戦列を統一して、帝国主義者の息の根をとめること——これ

自らの位置を発見することはできぬはずである。したがって、このような愚劣な野合をつづける小官僚どもに対して、七年後の現在を、「ひと言でいいきるとすれば、一切が終り、なにこともはじまることが不可能な状況だといえる」として「相互に隔絶した地点で個々につづけられている自覚的な思想的奮闘」のなかにしか「あえて信じうるもの」がないとする常木守の発言（『読書新聞』七月三日付）は、常木が七年前の共産主義者同盟政治局メンバーであったことを想起せざるをえない私たちの胸を激しく持つ苦渋にみちた真実の呻き声なのであるが、ところで、その時、常木守が、書評紙ジャーナリストのインタヴューに答えてしまった瞬間に、彼自身のめざす「唯一の道」から危うくも外れてしまったことに気づいているか否かを私たちは疑懼せねばならぬのである。「沈黙によって現在を表現する」ことを欲するならば、おしゃべりなぞしない方がいいのだ。ここで私は、沈黙の営為を自らに課す苦痛に背離したことによって最も忌避すべき「状況」のなかに自己を登場せしめてしまった常木守とは対照的に、六・一五闘争に関する全き沈黙を守

私たちは分裂しつつ野合しつつ、樺美智子の屍を乗り越えて闘うことを誓い合う。私たちの眼は、常に、未来の闘いに向いているものごとくであって、決して、常木守や私のひとりの友人のように過去の闘いにこだわりつづけようとはしない。私たちがいま、腫をあげて戦後日本の階級闘争を一瞥してみるだけでも、多くの死者たちの貌を見ることもできるにもかかわらず、私たちは、今のところ、樺美智子ひとりを除いては、決してメモリアルの対象としようとはしない。私たち生者は、なんと、多くの屍を軽やかに乗り越えてきたことだろう！

一九四六年十二月十二日、東洋時計上尾工場の生産管理闘争のなかで、応援にかけつけた富士産業大宮工場の齋藤三郎が殺された。下手人は第二組合すなわち総同盟。アメリカ占領軍のジープと武装警官二百人がこの殺人を黙認した。凶器は鉄棒。一九四九年五月三十日、東交柳島の青年労働者・橋本金二が武装警官隊に殺された。上程中の公安条例を粉砕する都庁広場の集会のさなかでこの殺人は行われ、死者の胸には警官の泥靴の跡が刻印されていた。――反公安条例の闘争で死んだ東交労働者という

りつづけている私のひとりの友人について書き留めておかねばならぬと考える。

彼にとつての六月十五日は「安息日」である。この日、彼は、何もしない。何処へも行かない。何も考えない。ひたすら「安息」する。何故か？ 彼の唇が重く閉ざされたままついに一語も発することがない以上、私たちは文字通りの推測によつてしかその意味を尋ねることができないのであるけれども、それは、おそらく、彼の内部にあり、そして私の内部にも久しく潜んでしまっている「罪」の意識、樺美智子殺しに対する疼くような共犯意識である、と思われる。彼は六・一五被告団における唯一の非学生被告であり、七年前の激闘のなかで最も勇敢に闘い抜いたひとりであった。もしかすると、当日の死者は、樺美智子ではなく彼であったかもしれないのだ。鋭く突出した闘いの渦中に自身がいたことを痛切に想起すればするほど、なぜこの己れが死なずに樺美智子が死んでしまったのか、を彼は苦惱する。深く裂けた彼の傷口は七年の歲月をもつても医やされることなくまた彼の重い沈黙は吉本隆明風の状況論を週刊紙記者相手に一席ぶつことによつて開

すぐれて今日的なこの犠牲に対し、革新、知事、美濃部亮吉はいかなる感慨を抱いたであろうか！ さらに一九五二年五月一日、人民広場を血で染めたメーデー。都職労の青年・高橋正夫と法政大学生・近藤巨士が死んだ。凶器はピストル。つづいて同五月三十日、五・三〇記念集会のデモが板橋区岩之坂交番を通過した時、乱戦と化し、橋本和夫・桜井孝宏・関和彦の三人が一斉射撃の下に倒れた。関は教師、桜井は自由労働者、橋本は土建関係といわれながら身許さえ知れず、のちに古市翠という本名と略歴が公表されただけであった。その後八年一九六〇年三月二十九日、三池の労働者・久保清が刺殺された。右翼暴力団が襲撃しドスが久保清の下腹部に閃いた。三池労働者が武装自衛の課題を自らのものとするための高価な代償で、それは、あった。

そして一九六〇年六月十五日午後七時三十分、樺美智子が扼殺された。下手人はこの日、最大動員を呼号した一万九千三百十人の武装警官隊。特に二機と四機。共犯者は？ 私、あなた、無数の私たち！

私たちに先行する死者たちは、このように、戦後階級闘争史に記録されているもの

かれるほど単純なものでもない。だから、彼は、何もしない。過ぎ去った七度の六・一五、これから訪れるであろう不特定多数の六・一五、彼は「安息」をつづける。そしてそれ以外のすべての日々、彼は、肉体においても精神においても、卓越した戦士でありつづけることを自己に命令する。彼は大衆闘争の先頭に常に立つ。最も激烈な闘争の渦中に彼の姿を私たちは不断に発見する。さらに彼は、文闘においても最も地味で困難な任務を自ら引き受ける。たとえばエルネスト・チェ・ゲバラのメッセージを正しく日本語に移し換える作業に彼は心胆を砕く。あたかも彼は、六・一五当日、架空の死の「安息」に浸ることによつて、実在の生の熱源を保持したかのごとくに見える。そしてこの不屈の熱源の発火装置は、暗く重い、共犯意識なのである……。

さて、冒頭に述べたように、一九六七年六月十五日、私たちは、七つの――記録されざる小集会をもふくめるならば、正しくは七つ以上の「記念」集会を持つという情況に直面している。私たちは「分裂」を嘆くべきなのだろうか？ あるいは「野合」を唾うべきなのだろうか？ とまかくも、

だけでも九人を数える。そして樺美智子が死んでから七年、私たちは新しい戦士の碑を建ててはいない。私も死なず、あなたも生きています。樺美智子以前の無名戦士たちの死を私たちが忘却のなかに押しやっているのと全く同様に、私たちは、樺美智子以後にありえたかもしれない死についてもひたすら沈黙を守る。七年後の六・一五に七つ以上の「記念」集会が開かれてしまった奇妙な情況の深部には、この七年間、六・一五を超える闘争を表現していない私たちの無気力と無自覚が存在するのだ。「六・一五をくりかえさないために」と主張する革マル派（『早大新聞』六月十五日付）と対立して、私たちは、「第二の六・一五、第三の六・一五、そして無数の六・一五」を実現するための闘い、私たちの無数の死と無数のメモリアルに彩られるであろう戦闘への決意を新たにする。幽明境を異にする齋藤三郎が橋本金二が高橋正夫が近藤巨士が桜井孝宏が関和彦が古市翠が久保清が樺美智子が、歯がみをしながら地獄の入口で私たちを待っている。九人の死者たちとともに地獄へおちる日をめざして、私たち生者は、今日も出立せねばならぬのだ。